『劔岳 点の記』をよりよく理解するための解説

劔岳と立山信仰

立山博物館
福江 充

1. 劔岳と立山曼荼羅

江戸時代から明治時代にかけて，劔岳は地元の人々に地獄の剣の山，あるいは針の山として畏れられ，崇められており，古来，前人未踏の山，登頂不可能な山，登ってはいけない山，無理に登ると罰が当たって遭難する山などと信じられていたようである。とくにその意識は立山禅定登山者を案内した立山衆徒の間で強くみられ，劔岳を登山禁忌の山として登らない，登らせないといった風習が存在した。実際，劔岳はあまりにも急峻なため登攀が難しく，いつの頃からか，弘法大師が草鞋3千足を使っても登れなかったとの伝説が語られるようになった。

こうした劔岳に対する立山衆徒の意識が最も如実に表れた絵画に，「立山曼荼羅」がある。この絵画は，

➡劔岳（地獄の剣の山として畏れられた）

図－1　『立山曼荼羅　佐伯家本』（個人所蔵）

立山に関わる山岳宗教，いわゆる“立山信仰”の内容が，大きなものでは縦160cm×横240cmの大画面に網羅的に描かれた掛軸式絵画のことである。私の調査では，これまで，全国各地に47点の作品を確認している。立山曼荼羅の画面には，立山の山岳景観を背景にして，この曼荼羅の主題である「立山開山縁起」の幾つかの場面をはじめ，立山地獄の様子，阿弥陀如来と諸菩薩の来迎場面，立山山麓・山中の名所や旧跡，芦峅寺布橋大灌頂法会の様子などが，マンダラのシンボルである日輪（太陽）・月輪（月）や参詣者などとともに，巧みな画面構成で描かれている。江戸時代から昭和時代初期まで，立山山麓の芦峅寺村や岩峅寺村の宿坊の衆徒たちは，この立山曼荼羅を絵解きしながら，立山信仰を全国に広めた。

『劔岳 点の記』のなかには，宇治長治郎が柴崎芳太郎を立山山麓芦峅寺村の宿坊家・宝泉坊に案内した際，その主人の佐伯永丸がこの立山曼荼羅を用いて，柴崎に立山信仰の歴史や劔岳が地獄の針の山であることを解説する場面がみられる。

立山曼荼羅には劔岳が地獄世界の「刀葉林」，あるいは「刀葉樹」として描かれているが，それらは天台宗の僧侶源信（942～1017）の著書『往生要集』に記載がみられる。

「刀葉林」は地獄世界の中で最も浅いところにあり，比較的罪の軽い者が堕ちる等活地獄に属する。ここには，生前に殺生の罪を犯した者が堕ちる。刀葉林では全山に剣が林のように突き立っている。木の幹，枝，葉の全てが鋭い刃になっているので，亡者は獄卒に追われて逃げまわるうちに全身が切られたり刺されたりして，傷だらけになってしまうのである。立山曼荼羅では，剣の刃を突き立てたような鋭い岩峰の劔岳が，その特異な山容から「刀葉林」に見立てて描かれ，亡者が獄卒に追われ，身体を傷つけながら，山上へと逃げ登っている。

図－2　劔岳出土の銅錫杖頭と鉄剣
（富山県［立山博物館］所蔵・国指定重要文化財）

「刀葉樹」は地獄世界の衆合地獄に属し，等活地獄から黒縄地獄を経て，その下にある。そこには生前に殺生と偸盗・邪婬（夫または妻以外の異性との情事など，人の道にはずれた性行為）の罪を犯した者が堕ちる。

刀葉樹とは，刃物のように鋭く切れる葉をもった木である。獄卒が男性の亡者を捕まえて刀葉樹の林に放置する。そのうち亡者は，刀葉樹の頂に綺麗に着飾った美女がいることに気づく。亡者が木に近づくと，美女は亡者を誘惑する。亡者は嬉しくなり，すぐさま木に登っていく。すると，刃物のような木の葉が全て下を向く。亡者は美女の魅力に取り憑かれ，刃物の葉で身体の肉や筋がずたずたに切り裂かれていくのも気にかけず，ひたすら美女を求めて木の頂へと登っていく。

ところが，やっとの思いで頂にたどりついても美女の姿が見えない。亡者が探しはじめると，いつのまにか木の下にいる。そして先ほど同様，亡者を強烈に誘惑する。これを聞いた亡者が急いで木から降りようとすると，今度は葉が上を向き，またもや身体が切り裂かれていくのである。何とか地上に降りると美女は木の頂にいる。亡者はこれを見てまた木に登り出す。こうして亡者は自分の心に惑わされ，同じ行為を果てしなく長い時間，繰り返すのである。

2. 劔岳山頂で見つかった銅錫杖頭と鉄剣

劔岳は登山禁忌の山だったが，明治40年（1907）7月13日，旧陸軍参謀本部陸地測量部の測量官柴崎芳太郎と測夫・生田信らの一行が，三角点設置のために劔岳の登頂を果たした。当初はこれが劔岳の初登頂かと思われた。だがその登頂の際，柴崎一行は山頂で銅錫杖頭と鉄剣を発見し，持ち帰っている。のちの明治44年（1911），高橋健自氏が『考古学雑誌』第1巻第7号でこの銅錫杖頭を取り上げ，成立時期を奈良

時代末期から平安時代初期と推定した。この遺物により，登攀がなかなか困難な劔岳も，奈良時代末期から平安時代初期の頃，すでに諸国の山岳霊場を巡って回るような山間修行者に登頂されていたことがうかがわれる。なお，この銅錫杖頭と鉄剣は，昭和34年（1959）に「銅錫杖頭附り鉄剣」の名称で国の重要文化財に指定され，現在，富山県［立山博物館］に所蔵･展示されている。

ところで，立山は古くは「たち山」と呼ばれていた。「たち山」は立山連峰を全体的に指す呼称とする説や，連峰のうち，剣のように鋭い山容の劔岳を指す呼称とする説がある。江戸時代中期の百科事典『和漢三才図絵』には，劔岳の本地は仏の不動明王とされ，垂迹は神の天手力雄命とされている（現在は須佐之男命）。さらに，天手力雄命は日本の記紀に登場する神であるが，それは地元の土着の神としては刀尾権現とされている。ここで興味深いのは，「たち山」の呼称をはじめ，不動明王は持物の「剣」が，刀尾権現は「刀」の文字が，「剣」を強くイメージさせる点である。こうした劔岳の「剣」のイメージと山間修行者の守護尊を不動明王とすることなどを併せて考えると，劔岳の山頂に銅錫杖頭と鉄剣を遺していった修行者にとっては，鉄剣こそが劔岳に奉納すべき「主」の品であり，錫杖は「副」の品だった可能性も考えられないだろうか。

3.『地蔵菩薩霊験記絵巻』に描かれた剣の山の劔岳

米国･フリア美術館所蔵の『地蔵菩薩霊験記絵巻』は，立山信仰の内容を描いた最古の絵画であるが，13世紀半頃の成立と推測されている。現在では詞，絵ともに欠失があり，詞5段と絵6段が1巻となっているが，その第2段の絵は，詞書の題名に「地蔵講結縁の人にかはりて苦を受給事」とあり，次のような内容である。

立山に登った修行僧が，夜中に悲しみ訴える声を聞く。それはもと京都七条に住み，若くして死んだ女性で，いま立山の地獄に堕ちて早朝，日中，日没の3度，苦しみを受けるという。しかし生前，地蔵講に2度結縁聴聞したおかげで，火災の苦しみと「剣の山」の苦しみは，地蔵菩薩が代わって受けてくださるが，鬼に鞭打たれる第3の苦しみだけは逃れることができない。どうか都の父母に告げて，自分の生前使っていた鏡を地蔵菩薩に供養し，この苦から助けてほしいと頼んだという。

この内容は，平安時代末期の仏教説話集『今昔物語集』に収められた立山地獄説話のひとつ「越中立山の地獄に堕つる女，地蔵の助けを蒙る語」（巻第17第27）を題材としている。同話は，立山参詣中の修行僧延好が，立山地獄に堕ちた女性亡者の依頼を受け，その京都七条の生家を訪ねて，遺族に地蔵菩薩像1体の造立や法華経3部の書写，亭子院での法会など，亡霊救済の追善供養を営ませた話である。そのなかで，女性が生前，祇陀林寺の地蔵講に1，2度参詣した功徳で，地蔵菩薩が毎日地獄にやって来て，早朝，日中，日没の3回，自分の身代わりとなって苦しみを受けてくれることも併記している。

実際に作品の画面を見ていくと，それは次の4つの場面で構成されている。①鳥居がかすむ立山の山中，画面右上に坐すのは修行僧延好で，女性亡者が延好に合掌して，救済を哀願している。②その左には女性亡者に代わって炎に焼かれる地蔵菩薩。③さらに左には女性亡者に代わって剣の山に登る地蔵菩薩。画中に「劔岳」を示す文字注記はないものの，この剣の山はおそらく「劔岳」であろう。④画面下部には断崖に逆さ吊りにされて鬼に鞭打たれる女性亡者。

さて，『今昔物語集』の立山地獄説話と『地蔵菩薩霊験記絵巻』の内容を比較すると，前者には，女性亡者が受けた責め苦の内容は具体的に記されていないが，後者には，責め苦のひとつに地獄の剣の山が記されていることから，どうやら平安時代末期から鎌倉時代中期の間に，劔岳が地獄の剣の山，あるいは針の山に見立てて信仰されるようになっていたものと考えられる。

【プロフィール】

福江 充（ふくえ・みつる）。1963年，富山県生まれ。富山県［立山博物館］主任･学芸員。文学博士（金沢大学）。日本学術振興会賞・日本山岳修験学会賞・とやま賞を受賞。著書に『立山信仰と立山曼荼羅』（岩田書院），『近世立山信仰の展開』（岩田書院），『立山曼荼羅』（法蔵館），『立山信仰と布橋大灌頂法会』（桂書房）などがある。